

## 個別と普遍をめぐる〈非同一的なもの〉の問題 ——アドルノの現象学研究を手がかりとして——

Individuality and universality as the “Non-identical”  
—Themes in Adorno’s phenomenological studies

青柳 雅文\*

### はじめに

本稿は、Th・W・アドルノの現象学研究における個別と普遍の諸問題を考察する。この考察においては、個別と普遍にたいするアドルノとE・フッサールの理解の比較とともに、アドルノによる批判の妥当性が検討される。そしてこれによって、アドルノの〈非同一的なもの〉の思想を解明する契機が与えられることになる。そのために本稿では、アドルノの現象学研究に関する主著『認識論のメタ批判 フッサールと現象学的アンチノミーに関する諸研究』（1956年、以下『認識論のメタ批判』と略記）から、第二章「スペチエスと志向」が取り上げられる。この章は、刊行に先立ち『哲学論叢』誌に掲載されたものにもとづいている<sup>1)</sup>。

以下では、まずアドルノがどのような視座から現象学を理解しているか確認する。その上で、個別と普遍にたいするアドルノとフッサールの理解を比較しつつ、アドルノの批判について検討を加える。とくに比較にあたっては、抽象理論にたいするふたりの理解が手がかりとなる。さらにこの考察を通じて、アドルノにおける〈非同一的なもの〉について、その一端が浮き彫りになる。

---

\* 立命館大学文学部非常勤講師

## 1. 現象学にたいするアドルノの視座

まずここでは、フッサールの現象学にたいするアドルノの基本的な視座を確認しておきたい。彼は『認識論のメタ批判』の冒頭、この著書を「フッサールの純粹現象学を弁証法で精神で解明しようとする試み」(GS. 5. 12)と位置づけている。ここで言う「弁証法で精神」は、G・W・ヘーゲルの哲学からの影響を示唆しており、以下のアドルノの批判には、この影響が垣間見えることになるであろう。その上でアドルノは、次のように述べている。

〔……〕フッサールは老年に至ってもなお、彼の現象学全体を簡潔に叙述しようとする試み〔=『デカルト的省察』〕に付された表題において、哲学の絶対的基盤に値するあのデカルト的仮象を呼び出した。たんなる存在者のあらゆる痕跡から純化された精神への省察によって、フッサールは〈第一哲学 *prima philosophia*〉を再興しようとした。(GS. 5. 13)

アドルノは現象学について、ふたつの立場を見出している。ひとつは存在者から純化された「精神」、つまりデカルト的な超越論的意識へと引き戻して、それを基準とするあり方、いわば主観主義である。そしてもうひとつは、伝統的な〈第一哲学〉という名のもとで<sup>2)</sup>、何らかの究極的なものを前提とする「根源哲学」(GS. 5. 20)あるいは「根源理論」(GS. 5. 27)を構想するあり方、いわば基礎づけ主義である。この構想のもとで、「固定的なもの、支えるものを、哲学的概念は原基的なものとして表象する」(ebd.)とされる。というのも、「支えるものは〔……〕支えられるものよりも単純なはず」(ebd.)だとされるからである。そして、単純なる基礎をもとめる現象学においては、つまり「根源理論においてはつねに、支配への親和性の保証として、複雑なものへの憎悪という退行傾向が幅を利かせていた」(ebd.)とされるのである。

このように、アドルノは現象学を、主観主義的であり基礎づけ主義的であると理解している。だがその一方で彼は、現象学の中に自らその立場を批判的に乗り越えようとする契機を見ている。彼によれば、「フッサール哲学の努力は、防御の努力であり、主観主義を見抜きながらも、これを抽象的に否定するのだが、やはりこの否定は、主観主義の影響圏内にとらわれたままで、躍起になって反対する弱点を共有している」(GS. 5. 97)。これによって現象学は、「[……] 主観と客観の間の無人地帯<sup>3)</sup>、それらの宥和という欺瞞的な蜃気楼」(ebd.)の中を漂うとされる。そしてこの蜃気楼のような領域、つまり「花のように肉体を持たず血の気のない女性像が「本質」と呼ばれるこの領域は、その対向へと向かう主観的な態度である思念のはたらきによって哲学的に省察されるが、けれどもこの対向の内実は主観的作用の中で汲み尽くされている」(ebd.)と表現される。比喩的ではあるが、アドルノは、現象学が主観主義を自覚しているにもかかわらず、消極的な宥和を図り、結局主観主義に留まることになる指摘している。彼によれば、こうした帰結に至るのは、思念することによって「経験とは対照的に、個別的な「作用」と「体験」の孤立化をつうじて、思考されているものが本質となる」(GS. 5. 97-98)からだとされる<sup>4)</sup>。したがって現象学は、思念するはたらきあるいは主観的な思考のはたらきにもとづいて、「単独の志向に贈られた普遍」(GS. 5. 98)としての本質をもとめることになる。このことから現象学は、個別的なものに向けられる個別的作用をつうじて、そこからひとつの普遍が取り出される、という発想を含んでいるとみなすことができるであろう。では、以上のように理解するアドルノの視座をふまえて、彼の現象学批判について考察を進めることにしたい。

## 2. アドルノの現象学研究における個別と普遍

本章では、フッサールの抽象理論にたいするアドルノの理解を手がかりと

しながら、個別と普遍にたいするふたりの理解の相違を浮き彫りにする。そしてこれによって、個別と普遍との関係をめぐるアドルノの批判について検討をおこなう。

## 2-1 同一性と抽象

アドルノはフッサールの『論理学研究』第二巻（1901年）を引き合いに出して、そこに注釈を加えている。ここではまず、同一性をめぐるふたりの見解の異同を確認したい。アドルノはフッサールの主張から、次の箇所を引用している。

われわれが赤をスペチエスにおいて思念することによって、赤い対象がわれわれに現出し、そしてこの意味において、われわれは赤い対象に眼差しを向ける（だがこの対象をわれわれは思念しているのではない）。同時に対象には赤の契機が際立ってくるのであって、その限りににおいてわれわれはここでもまた、われわれはその赤の契機に眼差しを向けているのだ、とすることができる。しかしわれわれはまた、この契機、つまり対象のこの個体的に規定された個別の特徴を思念しているのではなく、われわれがそれを思念するのはたとえば、現出している対象の別々の平面部分の赤の契機は等しくみな別々である、という現象学的観察を言明する場合である。赤い対象が現出し、そしてその対象において赤の契機が際立って現出しても、われわれが思念するのはむしろある同一の赤であり、しかもわれわれはこの赤をあるあたらしい意識様態において思念するのであって、この意識様態をつうじて個体的なものではなくまさにスペチエスがわれわれにとって対象的となるのである。（Hua. XIX/1. 111-112）

次に、このフッサールの見解にたいするアドルノの注釈を挙げておこう。

特殊を、ここでは「直観の赤い対象」を「思念すること」において同時に、その対象のスペチエスを構成する徴表である「赤の契機」が生じ、そしてこの契機に「われわれは眼差しを向け」、したがってわれわれは、他の範例、他の「赤い諸対象」をその際に必要とすることなく、スペチエスの理念的な統一を確保する。この議論の弱点は「同一の」という用語の使用にある。なぜならば、あの〔思念〕作用において実際「同一の赤」が意識され、それをつうじてたんに個体的なものではなく、まさにスペチエスが言い当てられるとされているからである。しかし、同一のものについて有意味に語られるのは、もっぱら多数のものとの関係においてのみである。「同一の赤」はそもそも、赤いということをたがいに共有しているより多くの対象においてのみ存在するのである——この〔同一の赤という〕表現が、事物において知覚された色彩の連続性、したがってたんに現象的なものに関わるというのでない限りでは。(GS. 5. 104)

ここでアドルノがフッサールの「議論の弱点」として指摘するのが、「同一の identisch」という用語の使用である。アドルノと言えば〈非同一的なもの〉の思想で知られているが、このことを念頭におきつつ、同一性にたいするふたりの理解と、弱点というアドルノの指摘の妥当性について検討することにしたい<sup>5)</sup>。

フッサールは引用において「同一の赤」という表現を用いている。彼において「赤」は、個別的な「赤い対象」をつうじて見出されるスペチエスであり、「同一の赤」は、この「スペチエスにおいて思念」された意味、理念的な統一体を指している。個別の「赤い対象」の「赤の契機」がどのように現出しても、それらがバラバラになることなく、ひとつにして同じ「赤」、自己同一的という意味での「同一の赤」が思念される。フッサールによれば「〔……〕真の同一性は、スペチエスの同一性にほかならない」(Hua. XIX/1.

105) のであり、それゆえ「理念的統一としてのこの同一性は、さまざまな多様の個体的な個性性を包摂しうる」(Hua. XIX/1. 105-106)とされる<sup>6)</sup>。フッサールにおいて同一性は、包摂的な統一性(単一性)あるいは自己同一性を含意している。そして「同一の赤」へと思念の作用は向けられ、この思念される「同一の赤」が個々の対象の諸契機を基礎づけ、同一性の成立する前提となっているのである。

これにたいしてアドルノの場合に「同一の赤」とは、注釈にもあるように、「特殊」である諸対象に共有されている特徴を指している。この特徴が共有されるのは、「多数のものとの関係において」可能である。つまりある「赤の契機」の特徴が別の「赤の契機」の特徴と合致しているという意味で「同一の赤」である。彼において同一性とは、他なるものとの合致のことを指している。そしてその際、思念の作用は「赤い対象」へと向けられ、そこから取り出される「赤の契機」が「同一の赤」を形成するのである。

このように、同一性にたいするふたりの理解を比べると、いくつかのことが明らかになる。まず、ふたりとも「赤」を多数のものの統一として理解している点では共通している。ところがその「赤」が「同一」だと言われるときに、ふたりの間にはその指し示される事態に相違が生じてくる。フッサールが「赤」という意味の自己同一性を「同一」と呼ぶのにたいして、アドルノは、諸々の契機の特徴が合致していることを「同一」と呼んでいる。もちろんふたりが指し示している事態に相違などないように見えるかもしれないが、アドルノはそう考えてはいない。彼はフッサールにおいて「あの作用〔＝思念すること〕において知覚されたものが、その知覚のおこなわれている間、ひとつにして同じのものでありかつそうあり続けているということが、さまざまな範例の統一特徴としての概念の同一性の代用を務めている」(GS. 5. 104)のではないかと述べている。ここでアドルノは「概念」に言及しているが、彼の言う概念とは、諸対象に共通の特徴から形成され、その共通性のことが同一的だと呼ばれる。彼が考える同一性は、概念の同一性

を指すのである。だが『論理学研究』においてフッサールは、このように概念を形成する仕方を同一性として採用していない。このことについてアドルノは、「普通に抽象と呼ばれるもの、つまり多数の対象から個別的な徴表を取り出すことによる概念形成は、フッサールによって非本来的として特徴づけられる」(GS. 5. 103)と述べている。アドルノにおける同一性と呼ぶものは、フッサールにおいては相等性<sup>7)</sup>と呼ばれ、非本来的なものだとされる。このように、ふたりの間では同一性として指し示されている事態に相違が見受けられるのである。

だがこのような相違が生じるのは、同一性そのものが指し示す事態よりも、その同一性の形成過程のほうに起因するように思われる。その形成過程とは<sup>・</sup>抽象のはたらきであり、ふたりの間には、この抽象のはたらきにたいして見解の相違がある。前述のように、アドルノにおいて「同一の赤」は、諸対象の「赤の契機」の特徴が合致していることで成立していた。また彼からすれば、フッサールにおいては、ある対象に思念の作用が向けられることによって「同一の赤」が成立し、このことを可能にするのが〈理念化する抽象〉なのである。

ここでフッサールにおける〈理念化する抽象〉について確認しよう。彼は次のように述べている。

[……] これら多様な思考形式においてとらえられた諸対象がそのようにとらえられたものとしてわれわれに明証的に「<sup>・</sup>与えられて」いるような諸作用であり、換言すれば、概念的な志向が充実され、その明証と明晰を獲得するような諸作用である。こうしてわれわれは、何か赤いものについての単独的な直観にもとづいて、<sup>・</sup>赤というスペチエスの統一をじかに、「それ自体で」把握する。われわれは赤契機へと眼差しを向けるが、独特の作用を遂行するのであり、その作用の志向は「理念」へと、「普遍」へと向けられている。この作用の意味での抽象は、たんに赤契

機を注意したり際立たせたりするのはまったく異なる。われわれはこの区別を示すのに、理念化するあるいは普遍化する抽象について繰り返し語ってきた。(Hua. XIX/1. 225-226)

〈理念化する抽象〉は、何らかの単独の対象によってスペチエス的統一を把握し、理念あるいは普遍と意識の志向とを直接的に結びつけるはたらきである。フッサールにおいては、こうした抽象によって同一性が成立するとされた。このことをアドルノは、「『同一の』は、決定的な箇所、厳密な意味では、特定の作用において思念されたもののことしか言いえない」(GS. 5. 104)と述べている。この引用にある「思念されたもの」は、フッサールが言うところの理念あるいは普遍のことであり、それが「特定の作用」、つまり〈理念化する抽象〉をつうじて意識の志向においてとらえられるのである。これにたいしてアドルノの場合に思念されるものは、前述のように「赤」ではなく「赤い対象」のほうである。それゆえ彼はフッサールの主張にたいして、「この同一性、つまり固定的に保持されている〈そこにあるこのもの Dies da〉への志向の関係が、まるですでに普遍概念の同一性であるかのように解釈されている」(ebd.)と指摘する。つまり彼にとってフッサールの〈理念化する抽象〉は、思念のはたらきがとらえる「赤」という意味との一義的な関係によって、同一性が成立していることになる。その際、このはたらきがどのような対象と結びついているか、ということは考慮されず、このはたらきの論理的首尾一貫性が同一性を表していることになる。さらにアドルノが想定している対象は、フッサールにおいて実際には捨象され、志向あるいは思念する意識と理念あるいは普遍との間においてのみ「赤」の認識が成立しているのである。

これにたいしてアドルノにおいては、フッサールであれば「非本来的」だと批判されるであろう抽象によって、同一的な概念を取り出そうとする。しかもこの概念は、多数の実在的对象に共通する特徴を抽出して形成される。



それゆえ同一性の成立には、複数の実在的対象の関係が必要になる。これらの対象から「赤の契機」が見出され、それらの契機が共通の「赤」という概念を形成するのである。

以上のように、同一性にたいするふたりの理解の相違は、抽象のはたらきへの理解の相違から生じていることがわかる。ところで、こうした両者の相違は、さらに「赤」をどこに見出しているか、あるいは何を対象としているのか、という点にも生じているように思われる。つまり両者とも思念するはたらきが「赤」に向けられている点では共通しているが、当の「赤」がどこにあるか、「赤」をともなった対象がどのようなものか、その理解が異なっていると思われるのである。そしてそれは理念と実在との間の相違という、あらたな問題ともつながっているのである。そこで考察をさらに進めたい。

## 2-2 理念と実在、概念と感覚

フッサールの場合、意識の作用は、その向かう先となるものが想定されている。そしてその作用は「赤」という意味へと向かっている。彼は「赤」を理念において見ており、理念的な対象としての「赤」が意識の作用と結びついている。これについてアドルノは、次のように述べている。

フッサールは、いわゆる学問の体系を示唆しつつ、一方で理念的な妥当統一へと希薄化された純粋な理性真理〔……〕を見て、他方で同時に「純粋な」意識内在、すなわちあらゆる自然主義的先入見を取り除いた意識内在を見ている。この両者の間には、純粋な意識内在が覗き窓のようにあの理念的統一へと開かれていること以外に連関はない。これが思念することの構造である。(GS. 5. 105)

アドルノは、フッサールにおいて思念の作用が意識内在と理念的対象との直接的連関を持つと理解する。だがその一方で「理念的諸対象は、たんに思念

されたものに過ぎないが、その由来は認識論的視圏に生じてこないがゆえに、それらを作り出す意識作用からは独立することになる」(ebd.)とされる。ここには、「志向の純粹な対象が理念的統一だとされ、また即自体が作用において現出するとされる」(ebd.)という事態、つまり一方で対象が理念的なものとして意識と直接的に結びつき、他方でそれが意識から自立しているという両義的な事態が見出される。アドルノはこのフッサールにおける両義性を批判的にとらえており、ここでの一連の引用も、こうした観点から言われている。このアドルノの観点は、対象に与えている性格やその認識をめぐって、フッサールとの間に相違があることで生じており、さらには彼らが理念と実在をどのようにとらえて用いているのかに起因すると思われる。

前節の最初の事例においてフッサールは、「赤」のスペチエスを理念的な対象としてとらえ、そこに意識の作用との関係を見ている。これをアドルノは、フッサールにおいて「赤」という理念的な対象と、個別的に現出してくる実在的な「赤い対象」が厳密に区別されているとみなす。とはいえ、この区別によって両対象が完全に断絶するのではない。「赤い対象」の現出をつうじて、理念的対象である「赤」が思念されるのである。だがそれとともに、対象の実在性が捨象されることによって、理念的対象へと迫り、対象の意味を問うことができるのである。このことが前述の両義性であった。これにたいしてアドルノの場合、実在的な個々の「赤い対象」には「赤の契機」が含まれ、そこから「赤」という概念が取り出されてくると理解される。このとき対象は実在的なものとしてとらえられている。そしてアドルノにとって、フッサールの言う理念的対象としての「赤」は、赤の諸契機に共通の普遍的な概念のことである。「赤」の概念は元々実在的な「赤い対象」から区別されているのではなく、他の赤い諸対象との比較をつうじて導き出される。アドルノはこのように理解しつつ、フッサールの主張に「混淆」(GS. 5. 106)があるとみなす。つまりそれは、「[……] われわれは赤い対象を観察しこの対象を赤いものと意識するとき——ここではふたつの契機の関係は宙吊りで

ある——、特別な感覚を持つだけでなく、同時にその感覚において赤一般の概念をも持つ」(ebd.) ということである。アドルノからすれば、フッサールは実在的な「赤い対象」と理念的な「赤」を峻別すると同時に、その「赤い対象」をつうじて「赤」がとらえられると考えているということになる。そしてこのことを可能にするのが〈理念化する抽象〉なのである。だがアドルノにとって〈理念化する抽象〉は、フッサールがおこなった理念と実在との区別を綯い交ぜにするはたらきだとみなされる。アドルノはこうしたフッサールによる区別の不徹底にたいして批判的に理解する。そのことが、アドルノに混淆と言わせているのである<sup>8)</sup>。その一方でアドルノは、フッサール自身もこの混淆を認めていないとみなしている。アドルノによれば、フッサールは、あくまで実在と理念を区別し、「ヒュレー的なものとカテゴリー的なものという伝統的な区分に、何のためらいもなく固執している」(ebd.) とされる。そしてフッサールは実在的なものを捨象した理念的な対象を、つまりアドルノ的に言えば実在の欠けた概念を重視していることになる。これにたいしてアドルノは、このように理念と実在を区別するフッサールの立場を肯定的には評価しない。そしてフッサールにおける抽象が「有意味に語りうるのはもっぱら、直接的なものが過ぎ去ったものと来たるべきもの、想起と予期に関係づけられる場合のみである」(ebd.) とアドルノは述べている。そして彼は次のように続けている。

意識が概念を欠いた純粹な〈そこにあるこのもの Dies da〉に立ち留まることなく、どれほど原初的であれ概念を形成するや否や、意識は非現代的諸契機、つまり「そこに da」存在せず、直観的でなく、絶対的に単独でもなく、他者と関係づけられている諸契機についての知をはたかせている。フッサールの方法の規準である、作用の「固有の意味」には、その作用に固有の意味以上のものが属している。思念されているものが、思念されるために、他者とともに思念されることをつねにもとめる

限りにおいて、あらゆる作用は自らの範囲を超越する。(GS5. 106-107)

ここでアドルノが述べているように、実在を捨象して概念形成されるにしても、作用の対象となる意味には非現在的な諸契機、つまり「固有の意味以上のもの」がともなっている。その限りにおいて、フッサールによる理念と実在との区別は貫徹することができない。したがってアドルノにとってフッサールの主張は、いずれにしても不徹底なままなのである。

ところでアドルノは、非現在的な諸契機や固有の意味以上のものをとらえようとする複合的認識の立場にある。こうした彼の複合的認識は、かつて彼の指導教員であったH・コルネリウスの思想から受け継がれていると思われる。この思想の系譜に沿って考えるならば、対象となるものは理念と実在の区別がなされることなく意識の体験連関においてとらえられ、体験・経験をつうじて概念として形成されることになるであろう。だがアドルノは、このコルネリウスの立場に留まらない<sup>9)</sup>。さらに彼は、この体験・経験を生じさせる実在的な対象との関係を見ている。このことは、彼が概念との対比で感覚のはたらきについて取り上げていることから端的に示されるであろう。たとえば彼は、フッサールにおける「混淆」に、概念と感覚との対比を結びつけていた。またアドルノは、概念と感覚が抽象のはたらきとともに含まれ、前者が理念の対象から、後者が実在の対象から成立すると理解している。アドルノにおいて感覚は直観的 *anschaulich* であり、実在の対象を直接的に受容したものである。つまり彼にとって感覚は、対象についての直接的認識を担うものであり、実在の対象とじかに結びつくものである。そして彼は、この感覚が〈理念化する抽象〉に含まれるとみなすがゆえに、それをフッサールが捨象していると批判するのである。

アドルノにとっては、フッサールの場合に捨象されてしまう実在の対象こそが、われわれの認識を成立させる上で最後まで不可欠なものであり、感覚はそのような実在の対象が何ものかとしてもたらされることを示唆してい

る。この何ものかとして与えられる対象こそが、アドルノの言う「固有の意味以上のもの」であり、〈そこにあるこのもの〉なのである。ではさらに、この対象のあり方について考察を進めたい。

### 2-3 〈トデ・ティ〉の理念と〈より以上〉

アドルノは、フッサールの抽象理論の中に感覚的にとらえられる実在的なものが示唆されているものの、それが概念から切り離され、捨象されていると批判していた。その上でアドルノは次のように述べている。

色彩感覚について思考しながら、それが空間と時間の中にあること、それが現実的であることが取り去られれば、この色彩感覚は感覚された色彩の概念となる、と言われる。だがこの場合、もっとも単純なことが見落とされている。つまりこの〈トデ・ティ τόδε τι〉の理念が依然として残っているし、この〈トデ・ティ〉のスペチエスにはけっして到達できないであろう、ということである。(GS. 5. 107)

フッサールは『イデーン』第一巻(1913年)において、〈トデ・ティ〉を「そこにあるこのもの Dies-da」とも表現しながら、「統語的形式を欠いた、ただまったくの個体的な個別性」(Hua. III. 33)であり、「それぞれの〈そこにあるこのもの〉は、その事象内容を含んだ本質成素を持っている」(Hua. III. 34)ものとして位置づけていた。彼において〈トデ・ティ〉とは、具体的な内容を持った個別的对象を指している。これにたいしてアドルノには、〈トデ・ティ〉にも「理念」や「スペチエス」を見出し、それをフッサールがとらえていないと指摘する。本稿で最初に取り上げたフッサールの議論の「弱点」とは、つまるところこの〈トデ・ティ〉の理念が見逃されている点にあると考えられる。アドルノの批判の核心には、この〈トデ・ティ〉という個別的なものをめぐる、理念と実在との問題、そして普遍の問題があると思われる

のである。

アドルノは前述の引用の後、〈トデ・ティ〉の理念について「この本質は、固定的・物的に構想されると同時に、たんに志向的として非実在的でもある作用意味とどのような点でも区別されないし、けっして「理念的統一」でもない」(GS. 5. 107) と述べている。アドルノが〈トデ・ティ〉の理念と呼ぶものは、フッサールが用いている意味での理念から区別されている。このように区別されていることは、前述の引用の直後でアドルノが次のように述べていることからもうかがえる。

本質に理念的統一が外から押しつけられているのである。スペチエスの理念的統一を抽象の遂行から解き放つことは、命題それ自体を思考から解き放つことと同様に幻想である。つまり結果としてはじめて規定するもの——ここでは概念——が実体化されているのである。(Ebd.)

アドルノはフッサールにおける理念的統一を實在から切り離されたもの、あるいは自立的で実体化された概念と理解している。その一方で、ここで本質と呼ぶ〈トデ・ティ〉の理念は、それ自体において實在と結びついた理念と呼ばれうる。ではアドルノが考える〈トデ・ティ〉の理念とはどのようなものであろうか。〈トデ・ティ〉は〈そこにあるこのもの〉、つまり個別を表現しており、それゆえ特定の対象、個別的対象を指し示している。しかしながら同時に、〈トデ・ティ〉はいずれの個別的対象も指し示することができる。つまり個々の対象から、個別的であるという契機、いわば〈トデ・ティ〉のトデ・ティ性とも呼ぶべき個別性を取り出すことができる。この取り出されたものが〈トデ・ティ〉の理念である。それゆえ〈トデ・ティ〉の理念は、まさに個別の個別性、個別という理念あるいは概念なのであり、あらゆる個別に共通する普遍性を持つのである。したがって、〈トデ・ティ〉の理念は個別のかつ普遍的であるという性格を持ち、そのような点で理念あるいは概念

と呼ばれるのである。

ところで、フッサールは〈理念化する抽象〉によって理念的对象をとらえられるとした。だが前述のアドルノからの引用にもあるように、フッサールは〈トデ・ティ〉の理念には到達できないとされていた。では〈トデ・ティ〉の理念もまた一種の理念的对象であるならば、なぜフッサールにおいてそこに到達できないということになるのであろうか。アドルノによれば、〈理念化する抽象〉は「文字どおりに理解すれば抽象的なもの、すなわち複合的な現象から抽出されるものだが、しかし同時に、まさにある具体的に直観的なものの一部分として、それ自体で直観的だとされる」(GS. 5. 108) はたらしきである。彼にとって、一方で直接的に与えられる対象の諸契機は感覚的である。他方で、これらの契機から思念することによって抽出されるのが概念である。〈理念化する抽象〉には、この感覚と概念の両方がともにある。だがその際、感覚に含まれる実在性は、この〈理念化する抽象〉において捨象されてゆく。アドルノによれば、これによって「〔……〕赤契機を際立たせることが、すでに純粋な与件ともはや同一でない」(ebd.) ことが隠されてしまっている。というのも、「知覚において赤「というもの」に眼差しが向けられるや否や、カテゴリー化され、知覚作用の統一は破壊される〔……〕」(ebd.) とされるからである。アドルノは、この捨象されるもののひとつが〈トデ・ティ〉であり、これには〈トデ・ティ〉の理念もともなうと考えている。それゆえ〈理念化する抽象〉によっては、捨象されてしまう〈トデ・ティ〉の理念には到達できないと理解されるのである。このように、〈理念化する抽象〉は、感覚的に受け取られる実在的なものを捨象してしまうが、それによってとらえられなくなるとアドルノが理解するのが、その感覚をつうじて与えられる〈トデ・ティ〉の理念である。〈トデ・ティ〉の理念は前述のように、個別の個別性を指し、普遍的な個別という逆説的な意味を持っている。個別と普遍の関係から、さらに〈トデ・ティ〉の理念に含まれる問題がこの浮き彫りになってくる。アドルノは次のように述べている。



フッサールは、いま・ここの赤の思念することと、この思念することがかならず必要とする赤についての知を取り違えている。普遍的な諸対象についての単独的な思念することを彼は普遍性の構成と、つまりそのような普遍性の基礎づけられた知とすりかえる。見たところ個別作用にのみ固有と思われる「理念的」内実が多様性、経験へと立ち戻って示されるにもかかわらず、抽象的なものの思念することを彼は抽象的なものについての明白な判断することと同一視する。もっぱらこのことが本質についての彼の静態的な構想を可能にしている。(GS. 5. 109)

アドルノはこのように批判しているが、問題となるのは普遍性の持つ意味合いである。引用においてアドルノは、普遍的な諸対象と普遍性とを区別し、そして後者を抽象的なものと呼んでいる。前者は、個別的な諸対象の共通性を指すのにたいして、後者は概念を指している。彼にとってこの両者は、思念のはたらきにおいて結びついており、その上で諸対象をつうじて概念が形成される。そしてこれらの対象に含まれるのが対象の個性、つまり〈トデ・ティ〉の理念である。ところが彼によれば、フッサールは概念の普遍性が判断することによって生じているとされる。アドルノは、この判断することが主観性にもとづくものとみなしており<sup>10)</sup>、それゆえフッサールの主張に主観主義的性格が残されていると見ているのである。これにたいしてアドルノは、普遍性を多様な個別的諸対象の間で共有されているものとみなし、その普遍性を受け取る経験のはたらきを重視する。そして彼は次のように述べている。

個別において普遍を手に入れることができるのは、まさに個別そのものが普遍に浸透されており、それ自体において媒介されているからにほかならない。だがこのことによって、「純粹体験」において原的に与えられるものに厳密に依拠するというフッサールの根本要請は解体される。つまり直接性はもはや真理の尺度ではないのである。(GS. 5. 110)



アドルノの考える普遍は、個別が持つ他者との諸関係であり、個別の中で共有されているものである。また彼において個別は、普遍性を、つまりその個別でないものとの媒介関係を含むものであり、いわば個別のかつ普遍的な個別性を持っている。彼からすれば、フッサールは個別の持つ普遍性を主観的判断によって外から押しつけているように見えるのである。アドルノは次のように続けている。

この〔直接的な〕与件をそれ自体において媒介されたものとして彼〔＝フッサール〕が見抜かなかったことで、実際にはきわめて抽象的な〈トデ・ティ〉が彼にとって一種の物自体、究極の揺るぎない基体となる。しかしフッサールによって「理念において定立される」〈トデ・ティ〉は、スペチエスでもなければまた個体化されたものでもなく、むしろ下にある何ものか、いわば論理以前のもの、本来あらゆるカテゴリー的なものから自由な原所与から構築されたものである。彼はたんにこの〈トデ・ティ〉からその事実性の「自然主義的」定立を剥奪するだけである。(GS. 5.110-111)

フッサールにとって〈トデ・ティ〉の理念は、たんに意識の作用の向かう先にあるという役割を果たすに過ぎなくなり、それが主観的に基礎づけられるのであれば、実在的対象との関係性を欠いた虚構的なもの、つまり具体性がないという意味での抽象的なものに留まるであろう。これにたいしてアドルノは、「純粋な〈トデ・ティ〉と本質、個体的なものとその概念は合致している」(GS. 5. 111)と述べているように、〈トデ・ティ〉をその理念と結びついたものとしてとらえ、それを個別のかつ普遍的、実在のかつ理念的なものとして理解する。そしてその上でアドルノは、フッサールの中の主観主義的性格が拭えていない点を批判するのである。

アドルノにおいて〈トデ・ティ〉の理念は、個別の個別性、普遍的な個別

として位置づけられ、それでないものとの媒介関係を含んでいる。そして彼は次のように述べている。

純粋な〈トデ・ティ〉、したがって概念は、〈トデ・ティ〉がそれ自身を超えてゆき、それ自身でないものとの関係の中に定立されるのでない限り、空虚で無規定的なものに留まるであろう。単独性は多を知ることのない思考の手を擦り抜ける。つまり「一者」をその個別性によって規定されたものとして定立することは、すでに〈より以上 Mehr〉を含んでいるのである。しかしこの〈より以上〉は、フッサールによって、個体的なものを規定する認識に端的に先行するものである〈トデ・ティ〉自体へと移し入れられる。まさに純粋な〈トデ・ティ〉における過少、ヘーゲルが特別な意味で抽象的だと呼ぶことにしていたあの無規定性こそが、そのような〈より以上〉になり、通常の意味での抽象体の代用品、つまり普遍概念の代用品になる。そこにある真理の契機、すなわち純粋な直接性が抽象体としてそれ自体において媒介されていること、絶対的な特殊が普遍的だということは、それが履行されるためには、まさに認識の過程によって直接的なもののこうした媒介的性格が明るみに出されることを必要とする。そしてまさにそこから、フッサールの個体的本質の理論は免れたがっているのである。(Ebd.)

アドルノの重要な指摘は、〈トデ・ティ〉がすでに〈より以上〉を含むという点である。まずこの〈より以上〉はたんなる〈多〉であるだけではない。〈多〉の場合、諸々の個別が外在的に並立したままに留まるであろう。彼がここで〈より以上〉と呼ぶのは、個別がそれでないものとの関係を含んでいること、そして普遍性を含んでいることを示しており、その限りで内在的性格を帯びている。また〈より以上〉がすでに含まれているということは、個別に普遍性や媒介関係が潜在していることである。フッサールにおいては、

この媒介性が捨象されたまま、純粹かつ直接的な意識の作用が目指されていた。前述のように、フッサールの〈理念化する抽象〉においては、理念と実在が結びつけられたのだが、結局はこれらを切り離し、実在的なものを捨象する結果となった。アドルノからすれば、〈理念化する抽象〉は対象への問いが不徹底に留まったということになるであろう。

ところで、前述の引用においてヘーゲルの名前が言及されていた。本稿の最初にも触れていたように、アドルノの一連の主張には、ヘーゲル哲学からの影響関係がうかがわれるであろう。とりわけ『精神現象学』での感覚的確信および知覚をめぐる議論と、本稿で取り上げた内容との間には重なり合う部分がある。たとえば、対象についての直接的認識としての感覚から個別のかつ普遍的という逆説的意味が見出される点や、主観主義を批判しつつ、〈より以上〉を含む〈トデ・ティ〉として個別が位置づけられる点は、ヘーゲル哲学を想起させるものである。そしてヘーゲルの弁証法と同様の媒介性の論理によって、アドルノはフッサールの直接性の理論を批判している。その限りにおいてアドルノの主張は、きわめてヘーゲル的だと言うことができるであろう。だがその一方でアドルノの主張は、たんなるヘーゲル哲学の模倣に留まるのではない。たとえばヘーゲルは、対象の矛盾した性質について、プラトン以来の〈一〉と〈多〉との伝統的な問題圏において理解するのにたいして、アドルノは対象の自己矛盾的運動をヘーゲル以上に徹底しようとする。このことが彼においては〈より以上〉という表現で示される。それは何らかの自己同一性に帰するのではなく、少なくとも矛盾の帰結が肯定的に語られることはない。彼にとって〈より以上〉はたえずそれ自体で超越してゆくものである。だがこの運動は無際限に続くことを意味するのでもない。次章でも取り上げるが、それは主観主義的に還元されるのでない（ヘーゲルにおける同一性とも異なる）個別的対象のある種の同一性も示唆している。このようにアドルノの主張は、ヘーゲルの弁証法を敷衍しつつも、その中におさまるのでない立場を志向しているのである<sup>11)</sup>。

アドルノにおいて〈トデ・ティ〉の理念は、まさに個別の中の個別、個別そのものである。その〈トデ・ティ〉の理念が問われる際、それは多様な個別を基礎づけるスペチエスでもなければ、何らかの理念の特殊化によって帰結するものでもない。むしろ〈トデ・ティ〉の理念として〈トデ・ティ〉が〈トデ・ティ〉であること、つまり個別の個別化の徹底、個別の自己同一性の徹底によって、個別そのものを超越し、その中で生じるこの個別でないものとの関係の中で明らかにされるようなものである。

## 2-4 「自由変更」をめぐる

次章に移る前に、もう一度確認しておくべきことがある。それはフッサールの抽象理論にたいするアドルノの批判の妥当性についてである。彼の批判には、少なからず疑義が生じるであろうことは容易に想像されうるが、本稿で最初に断っているように、アドルノがフッサールの現象学にたいして、特定の視座を持っていることは考慮しておくべきであろう。とはいえそれでもなお、これによって疑問が解消されるわけでもないであろう。そこでここでは、疑問となりうる事案の中からひとつを取り上げて考察しておきたい。

前述のように、アドルノは諸対象に含まれる共通の契機を取り出すことによって、自己同一的な概念が形成されると主張していた。「同一の赤」は、諸々の個別の「赤い対象」から比較をつうじて導き出されるのである。この概念形成に際して、アドルノは実在的对象との関係が不可欠だとみなした。だが、さまざまな個別的对象からひとつの概念あるいは理念を取り出すという方法は、フッサールにおいて同様のことが自由変更の過程として言われているのである。彼の『形式論理学と超越論的論理学』（1929年）によれば、この自由変更は、「あらかじめ与えられている諸対象の任意の種類の任意の諸範例について明白にすること」（Hua. XVII. 254）をつうじて、「自由で何度でもあらたに形成される変更体の中で必然的に不変のもの、すなわち不変更体を際立たせ、また何度でも変化するものの中にありながら分裂しない同じ

もの、すなわち共通の本質を際立たせる」(Hua. XVII. 255)ことを指す。それゆえフッサールの思想全体から見れば、アドルノの批判はフッサールの抽象理論のみに限定されており、その点において彼の批判は一面的に留まるのではないかという疑いが生じるのである。

しかしながら、アドルノは『認識論のメタ批判』において、この自由変更について言及しているのである。彼によれば、自由変更においては「個体的なものがあらかじめそのエイドスの「実例」である」(GS. 5. 123)とされる。つまり〈理念化する抽象〉が単独の個別の対象をつうじて普遍的本質を取り出そうとしたのにたいして、自由変更は個別が普遍的本質の実例あるいは範例としてあらかじめ与えられているとみなし、さまざまな任意の個別から本質が取り出されるという立場である。アドルノによれば、フッサールは「終わることのない収集作業としての抽象に代わって、個別契機に全体がすでに与えられているかのようにみなし、この契機を頼みとするという戦略」(GS. 5. 124)を実行しようとしている。そしてこれによって「フッサールは、事実的所与性の「範例的分析」をつうじて、事実性から自由な成果が析出されることを望んでいる」(GS. 5. 125)とされる。だがアドルノは、そのような変更には、「本質が変更にたいして無関係だという仮象」(ebd.)があるとされる。そしてアドルノは、「虚構をたがいに比較することによって自らの不変更体を獲得する本質形態は、フッサールが攻撃した〔非本来的な〕抽象理論を、より高次だと思い込んでいるところで反復している」(GS. 5. 126)と批判する。さらに「〔……〕経験の変更と混同されるのをフッサールが見ようとしない任意の想像変更は、経験の諸要素と入り混じっているのが避けられない」(ebd.)と指摘する。アドルノからすれば、現象学は「ラディカルな形態で、本質を「実例」から解放する試み」(ebd.)だったはずなのが、フッサールが退けた非本来的な抽象理論を再現しているに過ぎないと理解されるのである。

こうしたアドルノの批判は、経験をつうじて与えられる実在的对象に根ざ

す立場にもとづいていると言えるであろう。彼からすれば、フッサールはあくまで本質と事実を切り離し、その本質を洞察しようとしているのであり、自由変更の理論は、むしろフッサールの意図を挫折させ、試みを不徹底にさせるものとして理解されるのである<sup>12)</sup>。

### 3. 〈より以上〉と〈非同一的なもの〉

さて、アドルノにおいて〈トデ・ティ〉は〈より以上〉を含み、それでないものとの媒介関係を示唆するものであった。そして〈トデ・ティ〉の理念とは、個別の個別性、普遍的な個別を示すことであり、〈そこにあるこのもの〉が〈そこにあるこのもの〉であること、個別の自己同一性の徹底であった。〈トデ・ティ〉は個別の自己同一性を示すとともに、普遍的な個別であることによって、その個別の自己同一性を超越している。それはある意味で、その個別の自己同一性を自ら否定していることになる。そこにはその個別でないものとの関係、個別そのものにおける非同一性が生じることになる。この非同一性において顕在化してくるのが前述の〈より以上〉であった。この〈より以上〉は、個別の自己同一性をつうじて生じる個別の非同一性であり、これこそが、アドルノの言う〈非同一的なもの〉にあたるものとして考えられるのである。そこでこのことを明らかにするために、本章では彼の哲学的名著『否定弁証法』(1966年)を取り上げて、前章までの考察と結びつけることにしたい。というのも、彼はこの作品においても、『認識論のメタ批判』と同様の問題に言及しているからである<sup>13)</sup>。

アドルノはまさに個別を主題とした箇所次で次のように述べている。

〔……〕それ〔＝個別的に現存するもの〕は対自的に〔＝自立的に〕存在するのではけっしてなく、自己においてその他者であり、かつ他者と結ばれたものである。存在するものは、それであるより以上のものであ

る。この〈より以上 Mehr〉は存在するものに押しつけられたのではなく、そこから追い出されたものとして、それに内在したままである。その限りにおいて、〈非同一的なもの〉とは、事象の同一化に反する事象自身の同一性である。対象の内奥は同時にこの対象の外部だということを明らかにし、対象の閉鎖性は同時に仮象であること、同一化し固定化する振る舞いの反映であることを明らかにする。個別にこだわった思考はそれへと到達する。つまり、個別を代表すると称する普遍ではなく、その本質へと至るように。他者とのコミュニケーションは個別の中に結晶し、個別はその現存在の中で、コミュニケーションをつうじて媒介されている。(GS. 6. 164)

ここでもまたアドルノは個別を、それ自体においてその個別でない他者を含み、その関係性において存するものとみなしており、そして〈より以上〉を含むものとして理解する。この〈より以上〉が『認識論のメタ批判』の場合と同様の意味合いを持つことはわかるであろう。そしてさらに〈より以上〉は、個別的存在に内在しつつ、その個別の他者でもある。個別そのものを指し示そうとする同一化は、その同一性の他者として〈より以上〉を顕在化させるとともに、その個別が、同一化によって成立した同一性とは別の、〈より以上〉を含む個別として何らかの自己同一性を保持していることに気づかされる。アドルノにとって〈非同一的なもの〉とは、同一化の作用が個別の自己同一性をも超え出るところで意識され、同一化された個別における同一化されていないものであり、換言すれば同一化されていないものを含む個別の自己同一性なのである。その限りで〈非同一的なもの〉は、それはそれで一種の同一性を持っており、しかも同一化によって成立する同一性とは異なるものである。したがって、個別の個別化、つまり個別の自己同一性を徹底することによって、また個別の個別性を徹底的に思考することつまり個別の同一化によって、個別に内在する〈より以上〉が顕在化し、同一化による同



一性にはおさまらないものとして〈非同一的なもの〉が意識されるのである。このように、アドルノの両作品における議論は、たがいに重ね合わせることができ、そして〈より以上〉と〈非同一的なもの〉もまた結びつけて理解することができるのである。さらに前述の引用の直後でアドルノは、フッサールの現象学に言及しつつ、次のように述べている。

事実、普遍は、フッサールが認識したように、個体的事象の中心に住んでいるのであって、ある個体的なものを他の個体的なものと比較するときにはじめて構成されるのではない。なぜならば、絶対的個性は——フッサールはこの点に何ら注意を払わなかったが——、ほかでもない普遍性のために発動される抽象過程そのものの所産だからである。個体的なものを思考から演繹することはできないが、個体的なものの核心はあの極度なまでに個体化された、あらゆる図式を拒否する芸術作品に比べることができるであろう。そういう芸術作品を分析してみると、その個別化の極みの中に普遍の契機、つまり自分自身では気づかずにいる類型の分有が再発見される。(Ebd.)

ここでの個別と普遍の関係を『認識論のメタ批判』における議論と比べると、興味深い指摘がある。一方で、普遍が個別に内在しているという点は、『認識論のメタ批判』以降も論じられ、本稿でも考察してきたことであり、これまでの主張を踏襲していることがわかる。他方で、普遍が諸々の個別的对象の比較によって構成されるのではないという点は、『認識論のメタ批判』においてアドルノが採用した抽象の方法を退けていることがわかる。とくにこの第二の点は、対象の諸契機の比較による同一性の限界を示している。このことをアドルノ自身が認め、個別に内在する非同一性へと目を向けるようになったことが示されている。そしてまさに個別の自己同一性を徹底することが、個別の普遍性を明らかにし、その個別でないのものとの媒介関係を示し、



個別に含まれる〈非同一的なもの〉が意識されることになるのである。

## おわりに

以上の考察から、次のようにまとめることができる。アドルノはフッサールとの対比をつうじて、個別も普遍も単独的でなく、他者との関係性においてであると主張した。それゆえ一方で普遍は、たんに諸々の個別の外在的な比較から抽出されるだけでなく、それ自体において個別性を内在的に含んでいた。他方で個別もまた、それぞれ単独で外在的に並立しているだけでなく、それ自体においてその個別でないものを内在的に含んでいた。そして個別と普遍は、どちらか一方が基礎になるのではなく、相互の連関と浸透においてあるものであった。こうした個別と普遍をあわせもつものが〈トデ・ティ〉の理念であった。〈トデ・ティ〉の理念は個別の個性性、普遍的個別として〈より以上〉をすでに含み、それがアドルノにおける〈非同一的なもの〉のひとつとして浮かび上がった。〈非同一的なもの〉は、概念把握によって指し示され、同一化されてゆく点で個別的ではある。だがそれは、スペチエスのような個別の本質を指すのではない。その個別への問いをつうじて、その個別そのものを超越し、この個別より以上のものを明らかにする。このような〈非同一的なもの〉のあり方は、本稿で考察したアドルノにおける〈より以上〉を含む個別の位置づけと同様の性格を持つものとも言える。彼にとって〈より以上〉を含む個別は、彼における〈非同一的なもの〉のひとつとして考えられるのである。

\* 本稿は、日本学術振興会科学技術研究費 JP17K20193 による研究成果の一部である。

## 註

- 1) Theodor W. Adorno, *Spezies und Intention*. In: *Archiv für Philosophie*. 6(1/2), Stuttgart 1956, S. 14-41.
- 2) 厳密に言えば、〈第一哲学〉にたいするアドルノの理解は、フッサールの理解とは異なっている。フッサールの現象学がもとめる〈第一哲学〉とは、「この上なく完璧な無前提性を要求し、したがって自己自身に関しても、絶対的な反省的洞察を要求するものなのである」(Edmund Husserl, *Cartesianische Meditationen*. (1929) hrsg. von Stephan Strasser, *Gesammelte Werke*. Band I, Haag, 1950. S. 121)。フッサールがこのように述べているとはいえ、アドルノならば、やはり自己自身が根源として前提となっていると主張するであろう。
- 3) この「無人地帯 Niemandsland」という表現は、『認識論のメタ批判』公刊直後におこなわれた講義『認識論』(1957/58年)においても、また『否定弁証法』においても登場する(Vgl., Adorno, *Erkenntnistheorie (1957/58)*. Hrsg. von Karel Markus, *Nachgelassene Schriften*. Abt. IV, Vorlesungen, Bd. 1, Frankfurt am Main, 2018; GS. 6. 85)。アドルノは、主観主義を単純に転倒させて客観主義を唱えるような、二者択一的な発想を採用していない。とはいえ彼は、本文の引用にあるような欺瞞的な宥和を目指すでもない。あの表現は、彼のこうした姿勢をから出てきたものだと言えよう。なお、『認識論』講義は、主にI・カントの哲学を中心として、学問論や心理学、実証主義、形而上学との関係が論じられている。
- 4) この引用において対比的にアドルノが取り上げている「経験」は、彼にとって肯定的に評価されており、彼の主張を理解する上で重要な概念のひとつである。
- 5) たとえばアドルノは『否定弁証法』において、同一性の意味を次のように分類している。すなわち第一に「個人の意識の統一、つまり自我はそのすべての経験において同じものとして保持されていること」(GS. 6. 145)である。第二に、「論理的普遍性としての思考」(ebd.)である。第三に、「あらゆる思考対象の自己相等性」(ebd.)である。そして第四に、「主観と客観が合致すること」(ebd.)である。
- 6) フッサールはこの定義に際して、ギリシャ語を併記している。このことからうかがえるように、同一性にたいする伝統的な理解をふまえている。ただしこの定義について、アドルノが言及あるいは引用している箇所は見出されない。
- 7) 相等性は、たとえば赤い対象には赤の契機が同時に生じるが、それが他の対象の赤の契機と合致するということを指す。(Vgl., Hua. XIX/1. 117ff.)
- 8) この「混淆」という表現からは、アドルノのフッサールにたいする否定的評価がうかがわれる。アドルノの見方では、フッサールは理念と実在を峻別する立場であるが、その両者を不十分に統合させているのである。だが本文後述にもあるように、フッサールはやはり両者の峻別に固執しているとされる。アドルノにとって〈理念化する抽象〉は、失敗した試みとして理解されるのである。その一方でアドルノ自身は、理

念と実在を包括的に理解しようとしている。それゆえ彼は〈理念化する抽象〉にたいして、理念と実在との統合を可能にする試みとして、ある程度肯定的に評価していたのではないかと推察されるのである。このことは直接的に言明されているわけではないが、そもそもフッサールによる峻別にたいして批判的であったことから、そのように考えることも不可能ではないと思われるのである。

- 9) アドルノとコルネリウスとの関係については、拙論「現象学のアンチノミーと理念としての全体——アドルノのフッサール論、媒介者としてのコルネリウス」(『現象学年報』第23号、99-107頁、2007年)および「コルネリウスの思想とフランクフルト学派への影響」(『立命館文學』第625号、1115-1124頁、2012年)参照。本文ではアドルノの脱コルネリウ斯的な姿勢が述べられているが、とはいえやはり、『認識論のメタ批判』においてコルネリウ斯的な立場は継承されている。ふたりの影響関係はアドルノの大学時代に留まり、その後の彼の思想形成との間に断絶があるかのような研究が散見されるが、そのようなことはない。彼の現象学研究だけでなく、思想形成全般においても、コルネリウスからの影響は無視できるものではないのである。
- 10) 判断は伝統的に思考に属するはたらきとして理解され、その限りで主観的な作用のひとつとして位置づけられる。アドルノもまた、この理解に倣って用いている。
- 11) もちろんこの指摘のみによって、アドルノとヘーゲルとの相違が十分に考証できているわけではない。だがこの点については別稿に譲ることにしたい。
- 12) こうしたフッサールにたいするアドルノの批判の根底には、意識内在と超越、あるいは理念的なものと実在的なものにたいする立場の相違がある。そしてこのことは、フッサールにおける還元の理論をアドルノがどのように理解しているか、ということにも結びついている。これらの問題については拙論「現象学のアンチノミーと理念としての全体」(前掲)を参照。
- 13) ちなみに、『否定弁証法』の刊行直前におこなわれた『否定弁証法に関する講義』(1965/66年)においてもフッサールの現象学について取り上げられており、同様の問題に言及されている。たとえば、「フッサールが説いたのは、「本質」、したがって哲学的に重要なものは(もちろんそれは概念と呼ばれなければならないでしょう)、そのつど個別から観取されうるということ、したがって本質は、経験されたもの、具体的なもの、個別にたいする一種の「態度」の所産であり、一般に想定されているような、比較による抽象化をつうじて生じるのではないということです」(Adorno, *Vorlesung über negative Dialektik. Fragmente zur Vorlesung 1965/1966*. Hrsg. von Rolf Tiedemann, *Nachgelassene Schriften*. Abt. IV, Vorlesungen, Bd. 16, Frankfurt am Main, 2003. S. 107)と述べられている。これは『認識論のメタ批判』での内容を受け継いでいることがわかるであろう。

## 凡例

本文中の〈 〉は意味のまとまりを表示したもの、( )は補足表示である。

引用文中の〔 〕は、訳出に際して補足したものである。

引用文は拙訳であるが、邦訳があれば適宜参照している。

人名については、敬称を省略している。

## 文献および文中略号

Theodor W. Adorno, *Zur Metakritik der Erkenntnistheorie. Studien über Husserl und die phänomenologischen Antinomien*. (1956) hrsg. von, Rolf Tiedemann, *Gesammelte Schriften*. Band 5, Frankfurt am Main, 1971 (GS. 5 と略記、全集版の頁数を表記)

Theodor W. Adorno, *Negative Dialektik*. (1966) hrsg. von Rolf Tiedemann, *Gesammelte Schriften*. Band 6, Frankfurt am Main, 1973 (GS. 6 と略記、全集版の頁数を表記)

Edmund Husserl, *Logische Untersuchungen. Zweiter Band. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Erster Teil*. (1901) hrsg. von Ursula Panzer, *Gesammelte Werke*. Band XIX/1, Haag, 1984 (Hua. XIX/1 と略記、全集版の頁数を表記)

Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch. Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*. (1913) hrsg. von Walter Biemel, *Gesammelte Werke*. Band III, Haag, 1950 (Hua. III と略記、全集版の頁数を表記)

Edmund Husserl, *Formale und transzendente Logik. Versuch einer Kritik der logischen Vernunft*. (1929) hrsg von Paul Janssen, *Gesammelte Werke*. Band XVII, Haag, 1974. (Hua. XVII と略記、全集版の頁数を表記)